

古代漢音における四聲の輕重について

朝 山 信 彌

現在支那北方官話方言における四聲——陰平・陽平・上・去——の狀況を、切韻の四聲と對照して知られる事は、
一、官話の陰平聲は、切韻の上平聲のすべてに、更に切韻の上・下入聲の極めて一部を混じて居る。

二、官話の陽平聲は、切韻の陽平聲の他に、上入聲の極めて少數と、更に下入聲中破音擦音系頭音を有するもの・
喻母のものとを包含して居る。

三、官話の上聲は、切韻の上上聲の他、下上聲中清濁頭音を有するものと下入聲中のある少數のものとを包含して
居る。

四、官話の去聲は、切韻の上去・下去・上入の三聲の殆どすべてに、下上聲中破音擦音系頭音を有するものと、下
入聲中喻母を除く他の清濁頭音のものと、更に其他極めて少數の破音擦音系の下入聲とを混じて居る。

といふ結果的事實である。しかし、この事實は言ふまでもなく各々その時期を異にして生起して來た個個の音調史的
事實の長年月に渉る單なる堆積にすぎないので、個個の現象の中には、他の諸方言と共通のもの、然らざるものがあ

り、又極めて少數のものについては比較的近代の——あるもの、例へば本來の下入聲中下平聲に渉るものの如きは明らかに中原音韻以後における——發達にかかると推定せられるものも多いが、一方下上聲における上・去聲への音調の分化の如くすでに唐末以前の完成を思はせるもの等あり、その變遷の時期を一一年代史的な沿革の上に正確に配列しもどす事は、今日の資料を以てしては到底不可能であると言ふより他はない有様である。

二

ところで、「作文大體」の一異本、東山御文庫本文大體は源順の自撰と信ぜられて居るものであるが、その第八韻音の項における

凡文字必有反音反音義同 與韻音同 反音必有二字故略頌曰平上去入者依下字輕重清濁者依上字平聲之輕東重者同入聲之輕者德重者獨皆依韻音上去字得其輕重清濁之義也爰只舉平入二聲者上聲之重涉去聲々々之輕涉於上聲遞難分別故也二字之音能難反之時以悉藝可知之云云 平聲入聲輕重或不必依上字韻字多知之依平聲無輕音入聲無重音也清字又有如此之類

の記述は平安中期——即ち唐末における北方支那語の四聲の状況を示唆するものとして興味深く、又如上の支那四聲史に對するささやかな一個の資料たるを失はないものと思はれるのである。

三

さて、東山御文庫本文大體における四聲の記述は、支那唐末四聲史における如何なる祕密を我我に物語るであらうか。——この資料の解讀は我我に與へられた最も大きな課題である。

この資料の記述を解讀するためには、我我は先づそのさまざまな用語の概念について知らなければならぬ。特に清濁——輕——重——等。現代の常識的な概念をそのままかうした古い字音事實に適用する事程危険な事のない事を我我は十分によく知つて居る。

まづ「清濁」について考へて見よう。

此處では、近代の漢音において韻鏡の所謂「清濁」音（勿論喻母は除く。切韻音で鼻音・流音系の子音を頭音とした一類の音節）は濁音としてあらはれ、韻鏡の「濁」（切韻音で破音・擦音系の有聲子音を頭音とした一類の音節）は「清」「次清」（切韻で共に無聲子音頭音とした一類の音節。前者は無氣・後者は出氣）と共に等しく清音としてあらはれて來るといふ一個の不思議な原則が、又古代漢音においてもすでに同様に成立して居たといふ事實を、我我は更めて十分に銘記して置かうと思ふ。それについて唯數個の傍證をあげれば、かの和名類聚抄の音註では、清音の註記に多く切韻の「濁」（畜生——畜音甫——音救俗云畜生軸生二音聲母）、雀——俗云象乃布江（雜母）を用ゐる他に、濁音の音註に多く微母（琵琶——微波、味把）、孃母（沈——俗音女林反）、疑母（胡睡——音五萬）等を用ゐる傾向があり、——尤も切韻の「濁」によつても國語の濁音を註する事は出来る。それは一方所謂「和音」では近代吳音と同様の性格がすでに完成されて居たからであつた。——又、「增——考聲切韻云增韻丹反俗云木音之濁封土四方而高也」の如き註記（増は韻鏡濁）は漢音における「増」字のすでに清音であつた事實を物語る等を列擧する事が可能であらう。即ち古代漢音の「清字」は切韻の所謂清・次清・濁の所屬字に「濁字」はその喻母を除く清濁字に相當する事を、今明瞭に記憶して置く事が必要である。

更に清濁については、我がカ・サ・タ・ハ諸行を除くア・ナ・マ・ヤ・ラ諸行が「清」「濁」何れかの呼稱で指示される事があつたかどうかといふ問題の解釋も、後に述べる様に、我我の場合多少とも必要なのであるが、それにはやや後代の悉曇輪略圖抄(卷一)の引用が許されるならば「清音也良和末奈濁音加草多八」の記述や、更に平安末の「法華經單字」の卷尾における「本清字 王或圓等也。本濁字 是業上下等也」等は、たしかにその参考とすべき價値があるであらう。かのア・ナ・マ・ヤ・ラ諸行の聲點の傳統が濁音に指す重點でなく、清點に指すべき單點である事とも思ひ合せて、それらの諸行が古く濁音よりもむしろ清音としての意識を隨伴して居た時期の存在を、我我は今此處で假定する事が許される様である。

四

「輕重」の問題は、更に我我にとつて難解であるだけに興味深いものがある。

如上の記述から、細註を他ににして、「輕重」に關する事項を抄出すれば、

- (1) 略頌曰平上去入者依三声二輕重清濁者依四上字
- (2) 平聲之輕東重者同入聲之輕者德重者獨
- (3) 上聲之重涉去聲之輕於上聲之遞難分別故也

の三項となる。この中(1)によれば、平入聲における「輕重」は「東」「同」「德」「獨」であり、即ち切韻の頭音における清濁の對立に基づくものと考へられ、又(2)によれば、それは反切の上字、即ち音節構成における頭音的要素によ

つて決定される性質と考へられるが、又一方古代漢音においては、上述の如く直接にはその切韻における頭音の「清」「濁」の差異を保存して居たとは考へられないのであり、更に(3)によれば、細註における「重音」「輕音」の用語と共に、「輕重」が四聲における下位的區分としての一種の音調論的性質たるを思はせるものがあるから、この二種の想像から綜合すれば、これは恐らく古代における頭音の清濁から起原的には招來された、近代支那語の陰陽聲の如き一種の音調論的概念であつたと推定する事が、少くともこの資料の關する限り、他のいかなる想像よりも更に自然であると言ふ事が出来る。

ところで、この一見氣まぐれな推定に最も有力な裏づけを與へるに足る他の文獻的資料が存するのである。和名類聚抄の字音註記における四聲の輕重がそれである。即ちその中に「上聲之重」と註し、「去聲之輕」と註し、更にその他一般に四聲の輕重を註するもの總計五十數個が存するのである(この數値は流布二十卷本によるもので、所謂十卷本の諸本では多少の増加が見られる。一方二十卷本において増補されて居る可能性は無く、二十卷本における増補部の六卷には四聲の註記は一個所すら存しない)。我我は以下順次にその音註を調査するとして、先づ「上聲之重」と註する四十一個の漢字と、反切の記載あるものにはその反切も共に掲げて見よう。

曷	徐呂反	頤	胡感反
勸	白舅反	髀	傍禮反
贖	蒲忍反	瘡	符鄙反

疇	治里反	踈	胡瓦反
礎	士輦反	艇	徒鼎反
龜	徒可反	輶	胡果反
汞	胡孔反	炬	其呂反
鉉	胡犬反	楯	食尹反
橡	徐兩反	苧	直呂反
幌	胡廣反	簞	徒玷反
蓐	徒口反	杖	直兩反
錯	徐感反	釜	扶雨反
價	臣庚反	桶	徒摠反
衿	古旱反	菌	渠殞反
苜	其呂反	齊	辭啓反
雉	(ナシ)	象	祥兩反
羶	扶粉反	馱	扶板反
鯀	胡瓦反	鯢	胡本反
鯨	防眇反	函	胡感反
菑	徒感反	篋	徒敢反
白	巨久反		

さて、これらの反切の上字を類聚すれば、「衿」一字を除いてすべて切韻の濁である。尙「雉」一字には原本には反切がないが、廣韻によれば「丈几切」でやはり濁である。唯「衿」一字のみ反切の上字「古」は切韻の清で異例に屬するが、これは原著者の誤解と考へられる。何故なら「衿」は集韻、唐韻同切で下字「旱」は上聲でなく去聲であり、康熙字典によれば類篇亦「居案切讀去聲」と註すると言ふによれば、蓋し「去聲之輕」とあるべきを「上聲之重」と誤解したものと考へられるのである。「作文大體」における上記の記述よりすれば、その兩者の音調はまさに「遲に分別し難」きものであるのであつた。(和名類聚抄の著者における四聲の知識が必ずしも常に確實なものでなかつた事は、「霜」を註して「音蒼」——前者は平、後者は上——とし、「治」を註して「夜」——前者は上、後者は去——、「嗽」を註するに「走」——前者は去、後者は上——を以てする等の場合が彼が私意を以て附したと考へられる一字の音註の中には發見されるので想像される。尙「上聲之重」と註するものの更に十卷本において若干の増加を見る中に、

婢 便卑反 乳 而圭反

の如きものの存在は注意すべきである。即ちこれによつて切韻に「清濁」頭音を有する音節は又古代漢音において重音であつた事が想像されるからである。

次に「上聲之輕」と註するものはない。唯前掲の「馱」字に「扶板反上聲之重又輕音」と註するものがあるのは、一個の事例に過ぎず、特殊な文字における偶發的な音調の動搖を意味するものかどうか明らかでない。⁽²⁾

「去聲之輕」と註するものには、

古代漢音における四聲の輕重について

飀	初勤反	剃	他計反
𦉳	普賀反	策	側教反
麵	莫甸反	轉	傍封反
翼	施智反	角	初教反

の八字あり、中「麵」「轉」を除けば、「翼」字は「清」、他は「次清」である。異例の二字については、「轉」字は明らかでないけれど、「麵」字は切韻の「清濁」字母において「輕音」の音調の當時存在した事を示唆するものかも知れない。「轉」字は「濁」であるから他の六字の場合と對照して極めて異例に屬する。著者の誤讀——前述の「杆」字はほぼその確實な一例であらうが——でなければ、偶發的な音調の動搖と見なければならぬ。この字や前述の「飯」字の如き特殊な難讀の漢字においては、文語音や借用音の關係等で現在にあつても音調の偶發的な動搖を示す場合が多い様である。「麵」字も一個の事例故推論の確實性を保證する事が出来ない。又箋註本によれば「把」は「去聲之重」とあり、「普屬滂母唇音敷母之重別作駕作輕恐並非是」と論斷して居るが、尙諸本「輕」とあるに従ふべきであると思はれる。

次に、平聲に關するものでは、

榛子 唐韻云榛麥之輕音字亦作駝食輕和名波之波美榛栗也

とあるもの、及び

三銚 大日經疏云獨銚三銚五銚音皆俗云平聲之輕

とある二項であり、前者については「榛」は照母(滂)、「榛」は從母(濁)として理解すべく、後者については「平聲之重」(下總本)「上聲之輕」(箋註本)等の異本間の相異を考慮すれば、暫くその推定を保留する事が安全であるかも知れない。

入聲については、「箋——越縛反」「菊」二字共に「俗云本音之重」と註するものがある。この資料からは、我我は、和名類聚抄の著者の字音知識に關する限りの「重音」が當然俗音として考へらるべきものであつたと言ふ事を知り得るばかりである。因に、「翼」字は喻母(滂濁)であり、「菊」字は見母(滂)である。⁽³⁾

五

さて、以上和名類聚抄における四聲の輕重の知識を以て、直接の我我の課題である「作文大駮」の記述に立ち歸つて見よう。

「上聲之重涉去聲_ニ々々之輕涉於上聲_ニ遞難_ニ分別_一——これによれば、「上聲之重」と「去聲」と、「去聲之輕」と「上聲」との間には當時の漢音においては全くその音調上の差異を認めなかつたかに思はれ、上掲の和名類聚抄における音註に特に「上聲之重」「去聲之輕」に關するもの多いのも實はその「去聲」もしくは「上聲」と誤認される可能性を顧慮しての事であつたと考へられるのである(この記述からすれば、「作文大體」に所謂「上聲」「去聲」は本來的に「上聲之輕」「去聲之重」と呼べるべきものであつた事が考へられる)。

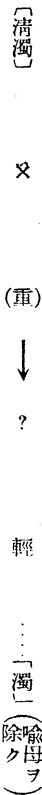
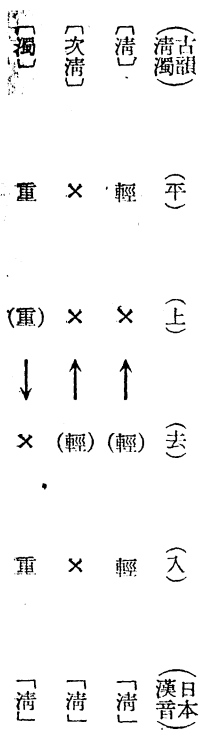
次に東山御文庫本の細註について述べなければならぬ。これによれば、平・入聲に關しては、——著者が上・去

聲に關して言はないのは、上述の如く、上・去聲における輕重の差異については、著者は規範的に指示する（和名類聚抄）以外に、現實的にはその差異を認めなかつた（作文大體）から、此處に問題とはならなかつたのである。——「輕重或不^レ必^レ依^レ上字。」と言つて前掲の略頌における絶対性を否定した後、その理由として「濁音多^ク知^ル之。依^レ平聲無^ク輕音^ノ入聲無^ク重音^ト也。清字又有^ル如^レ此^ノ之類。」と述べるのであり、當時の漢音において、濁字（即ち切韻「清濁」音）の平聲はすべて輕音無く、即ち重音であり、濁字（同上）の入聲はすべて重音無く、即ち輕音であつたといふ事實を物語るのである。しかして、この平聲の濁字については上述の「秦」字の音註を以て推理する事が可能であり、入聲の場合亦上述の「寔」字の音註にその有力な一資料を見出す事が出来るであらう。

尙、「清字又有如此之類」に關する若干の私見についても後に述べる。

六

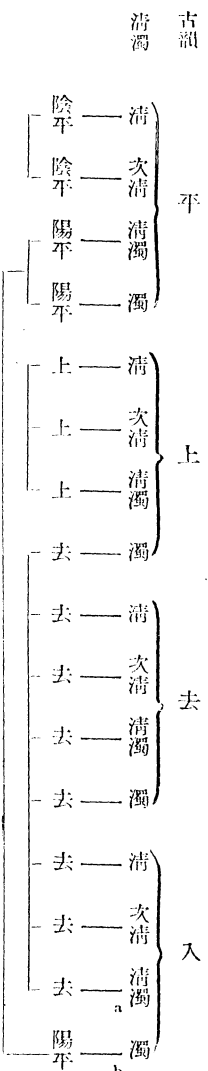
以上和名類聚抄、作文大牀の四聲の輕重に關する記述への考察を基礎として、當時の日本漢音における清濁各字母の輕重に對する所屬を圖表として示して見たい。



*この中×は徵證を有しない欄。？は不確實のもの。これらの中には、上掲の資料からの間接的推理、もしくは以下に述べる支那語の陰陽聲の狀況等から想像されるものも多い。

七

さて、私は、上にこの種の四聲の輕重と稱せられるものの性質が近代支那語における陰陽聲の問題と關聯を持つべき事をすでに示唆して置いた。事實陰陽聲における音調の分化の中には上述の如く早く唐末以前に完成したと信ぜられる部分があり、又特に支那北方官話に關しては、その音調の分化は少くとも音節頭音における濁音の消失以前に醸成されてゐた——唐末において音節頭音の濁音が餘程消失に近づいて居た事は、上述の漢音や又所謂天台漢音の形等から是非とも容認されなければならない。——と考へなければならぬから、その存在が唐末の北方支那語に認められる事に何らの不思議もないわけである。今本稿の冒頭において述べた近代北方官話の四聲に關する現状から、極めて偶發的なものは除いて、切韻の八聲に對する對照表を作れば、



古代漢音における四聲の輕重について

*a—清濁系列より喻母を除く。l—濁系列に喻母を加ふ。

其處でこの四聲の各々に上述の古代漢音における輕重の分化状態を比較して見よう。

平聲——此處では「陰陽」と「輕重」とが少くともその「清」「濁」に關する限りでは符合する。

上聲——現在の官話で「濁」のみ去聲となるが、古代漢音では「清濁」「濁」共に「去」に轉ずる。(古代漢音では「清濁」に關して特に喻母の貴重な例もある。「友」字の音註に「云久反上聲之重」とある。十卷本系の和名類聚抄に存するもの。)近代支那語における切韻下上聲の分化状態は官話各方言はほぼ同様で、吳語で多く陽上の一聲になるらしいのは異例であるが、安南音で「濁」所屬のもののみ陽去となる他、又去聲に陰陽兩聲を有する方言では必ず陽去となる、點では漢音の輕重の場合に一致する。ところで、この輕重の分化が古代支那語の系統を引くものである事が悉曇藏卷五の表法師の四聲「平中怒聲與重無別。上中重音與去不分。」の記述から推定せられる事には興味がある。(尤も所謂怒聲は梵語の無氣、有氣兩有聲音を指す名稱で當時の支那北方音の濁音——歴史的に鼻音系頭音のもの。當時の北方音の頭音では鼻音に先行される有聲破音であつたと信ぜられて居る。——を指す名稱であつたらしく、從つて「重」は歴史的に純粹有聲で始まる音節だけを指すものであつたらしい。上中重音の「重」はこれによれば必ずしも上記の「重」と同一内容であるか否か明瞭でない。)

去聲——北方官話のみならず、諸方言において、規則的にその陰聲の上聲となるものはない。この點は最も上記の「輕重」における状況の近代支那語と異なるものである。

入聲——北方官話において「濁」が陽平となり、「清濁」の去となる事は注目し得る。此處で、入聲消失以前の祖形を想像すれば、下入聲の清濁は上入聲と共に一類をなし、他の下入聲の一類に對して二種の音調論的な對立を示して居たに相違ないと思はれるが、「獨」字(切韻清濁)が「德」字に對して「重」であり、濁字がその清字「德」と共に「輕」であつた古代漢音の状況は、まさにこの假定的な祖形的段階を示して居るものとして興味深い。しかも近代北方官話において喻母が切韻の濁音系のもと共に一類をなす事の二次的な近代的發達の結果である事は、種々の事情から想像せられるのであるが、上記の「龔」字の音註において又その事實の正しく實證せられて居た事を我々は今此處に回顧しなければならぬのである。

八

日本古代漢音における四聲の輕重が近代支那語における陰陽聲の本質と直接の關聯を有すべきものであると言ふ事が私の結論である。これで私は私の課題に對する一應の解答をすましたのである。しかし、今最後にあたつて一言して置きたい事は、私のこの小稿はいかなる意味においても未だ研究の未定稿であり、獨立した一個の論考と言はんよりは、むしろ將來における論考の爲への一つの課題を暗示したものに過ぎないといふ事であつた。私が推理の途中に取残して來たいくつかの問題がある。それはどんなに小さい問題であつたにしても、この課題の解答の爲には是非解かれなければならないものである。そしてその爲には、本稿に用いた資料の更に精密な本文批判が必要であり、本稿に用ゐなかつた若干の字音資料——實際の中には四聲の輕重について不思議な記述を傳へて居る文鏡秘府論の様な文獻がある。——への廣い涉獵が必要であり、更に重要な事は近代北方支那方言、特に古く我々の漢音の發祥地とし

て信ぜられて居る晉陝系官話等の精密な音調論的研究の完成である。

私は今擱筆に當つて、私がこの小稿の中にたどしく摸索して來た一個の課題が、新しい光の中で、再び徹底的な解答の與へられようとする日のある事に心からなる期待を抱かざるを得ないのである。

註(1) 日本古代漢音の源流が唐宋以前の支那北方音にある事はほぼ定説となつて居る。その理由の詳細について此處に述べないが、私もその學說に賛するものである。

(2) 尤も「扶」字には「富瑜切」の如き清音も存しはしたらしい。(新撰字鏡)

(3) 和名類聚抄の著者には別に「杆」字の例もある事故、この正俗の判定には一抹の不安なしとしない。特にかうした二字に音調上の動搖が註されてゐる事は、「菊」字にとつては明らかでないけれど、「鑿」字については、本音喩母で重音なのを、源順において影母と混同され、かうした音註が加へられたといふ様な事情があつたのでなからうか、後放をまつ。

(4) つひに述べるべき機會を得なかつたが、要するに例へば喩母の場合等を指すのであらう。「説―余轅反」において、「余」は喩母平聲故に重、然るに説は喩母入聲故に輕となる如き場合。「清音」の名稱については前にのべた。保華經單字における「玉」「圓」二字は共に喩母である。

(5) この問題についてはすでに次の論文が出て居る。有坂秀世氏「悉曇藏所傳の輕重について」(音聲學會報)

(6) 古代においても流音、鼻音系頭音を有するものと共に「清濁」と呼ばれ、破音、擦音系頭音のものとは疎遠であつた。又前述上聲における場合等では喩母は各方言に通じて清濁音系のものに屬してゐる。(一六・八・二〇)